

© ACG プレスリリース
- 展覧会開催のご案内 -



今井祝雄 - 行為する映像 Norio Imai: Action on Film



《円》1967年|4分|モノクロ、サウンド(原盤は16ミリフィルム)
個展「Material Ecstasy」展示風景(2017-18) © Axel Vervoordt Gallery

アートコートギャラリーでは、「今井祝雄 - 行為する映像」展を開催いたします。

1960年代半ば、ビデオの登場によって世界の多くの造形作家が表現の可能性を広げました。今井祝雄はその視覚メディアの転換期を経験し、1967年に初の映像作品《円》を発表しました。本展ではその《円》を起点に、1980年代中盤までの映像作品から約10点を紹介します。

今井は、日本を代表する初期ビデオアートの作家の一人として認知され、その映像作品は制作当時から今日に至るまで国内外の展覧会や映像祭で紹介されてきました。1965年、19歳で具体美術協会の会員となった今井は、カンヴァスの表面に突起や穴を穿った白のレリーフで注目を集めました。当時今井は、照明やアニメーションにも関心を持っており^{*1}、FRP製の球形作品《Tankuro》や、モーターを内蔵し表面のラバーシートが隆起を繰り返す《白のイヴェント》^{*2} (いずれも1965年) など産業資材を用いた作品を発表し、「(フレームの)内と外」、「イメージとスクリーンの関係」を巡る思索を重ねていきます。

16ミリフィルムにパンチで1コマずつ穴を開ける手法でつくられた《円》(1967)は、今井が「視覚と聴覚の関係を探ったアニメーション」と呼ぶ最初の映像作品です。1秒間に24コマの円が、手作業のパンチングで生じた誤差によって振動します。サイレンス、ホワイトノイズ、ポップスなどの音を重ねたこの映像について、美術評論家のミン・ティアンポ氏は「フィルムというメディウムの物質性は光と影と時間の流れによって規定されているが、この作品はそれを前景化した」^{*3}と論じています。

具体の解散(1972年3月)後、今井は映像メディアを取り入れた作品を次々に発表します。テレビ局の廃棄フィルムを繋ぎ合わせた《ジョイントッド・フィルム》(1972)、ビデオを初めて使った《Braun Tube》(1974)、さらにそのころから今井は写真やビデオと絡めたパフォーマンスを展開し、この手法は1980年代中盤まで続きます。なかでも5つの代表作のダイジェストをおさめた《ビデオ・パフォーマンス 1978-1983》は、日本のビデオアートを再考する主要な展覧会^{*4}で上映されました。日常的な空間におけるありふれた身振りによる行為を介在させたこれらの作品は、不可視の「時間」の痕跡を印象づけるものであり、また、撮影したイメージをリアルタイムに再生できるビデオの同時性に着目し、パフォーマンスのなかにインスタント写真などを介入させることで、時間にズレや重なりを生じさせ、メディアに潜む物質性を露わにしようと試みています。

本展では、《円》を展示壁全面(約6メートル幅)に投影します。展示室全体が揺れ動くようなインスタレーションとなります。視覚と聴覚の実験である《円》の体験に加え、テレビが日常化した60年代、そして日々消費される情報としての映像が氾濫する時代(70~80年代)にかけて制作された今井の思考の一端を解き明かす映像表現も、あわせてご高覧ください。

*1 「顔 - シェル美術賞受賞の今井祝雄氏」インタビュー／山根貞男、『日本読書新聞』1966年10月17日号

*2 「空間から環境へ」(1966)に出品した際、この《白のイヴェント》を壁に埋め込み、東松照明などによるスライド写真を投影するインスタレーションを発表した。

*3 ミン・ティアンポ『The Medium is the Message: 今井祝雄』2014年、p.27

*4 「ラディカル・コミュニケーション: 日本のビデオアート1968-1988」(2007年、ゲティ・センター、ロザンゼルス)および、「ヴァイタル・シグナル - 日米初期ビデオアート」(2009 - 10年、ジャパン・ソサエティ、ニューヨーク／ボストン美術館／国立国際美術館、大阪 ほか巡回)など。

【展覧会概要】

展覧会名: 今井祝雄 - 行為する映像 Norio Imai: Action on Film

会 期: 2019年 4月12日 [金] - 6月15日 [土] *休廊: 日・月・祝、4/28-5/6

会 場: アートコートギャラリー 〒530-0042 大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F

開廊時間: 11:00-19:00 [土曜日-17:00]

◆ 関連イベント 4月12日 [金]

18:00 - 19:30 トークイベント [大日方欣一(写真・映像研究/九州産業大学芸術学部教員、武蔵野美術大学造形研究センター客員研究員) × 今井祝雄]

19:30 - 20:30 レセプション *トークは要予約 (Email: info@artcourtgallery.com または TEL: 06-6354-5444) *参加費無料

主催: アートコートギャラリー(株式会社八木アートマネジメント) | 協賛: 三菱地所株式会社、三菱マテリアル株式会社、三菱地所プロパティマネジメント株式会社

【お問い合わせ】アートコートギャラリー | 担当: 福田・浜田 | ※ビジュアル資料ご希望の方は、お気軽にお問い合わせ下さい。

〒530-0042 大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F TEL:06-6354-5444 FAX:06-6354-5449 E-mail:info@artcourtgallery.com www.artcourtgallery.com

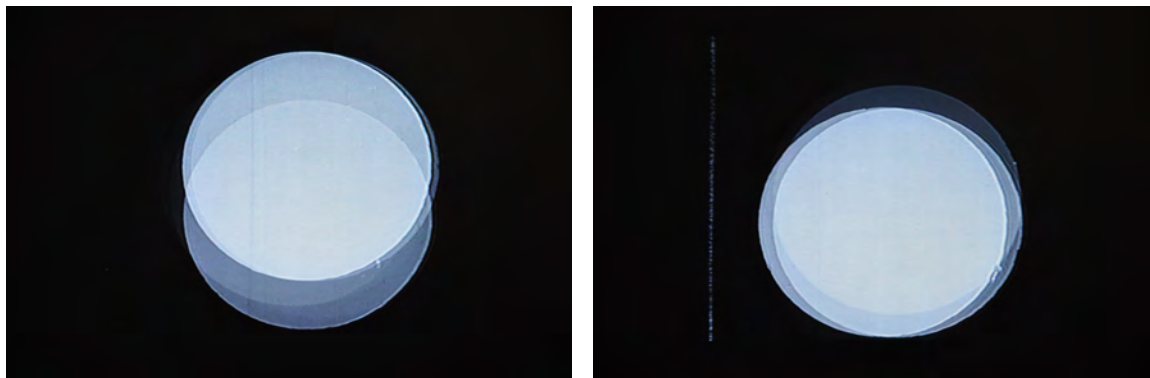
© ACG プレスリリース
- 展覧会開催のご案内 -



YAGI ART MANAGEMENT, INC.
ARTCOURT Gallery

今井祝雄 - 行為する映像 *Norio Imai: Action on Film*

■ 主な出展作品



《円》1967年 | 4分

モノクロ、サウンド（原盤は16ミリフィルム）*本展ではデジタル上映

□ 主な出展歴

- 1967 第1回草月実験映画祭（草月会館ホール、東京 ほか）
フィルム '67（勤労会館、京都）
- 1968 現代日本美術展—蛍光菊（ICA、ロンドン）
- 1970 第16回オーバーハウゼン国際短編映画祭（ドイツ）
- 1978 アンダーグラウンド・シネマから個人映画まで（東京都美術館）
- 1992 フレームの美学—アニメーションの理論と実践（埼玉県立近代美術館）
- 1995 日本実験映像40年史（キリンプラザ大阪、東京 ほか）
- 2013 具体：素晴らしい遊び場所（グッゲンハイム美術館、ニューヨーク）
- 2017 Norio Imai: Film and Video Works - Time Severed, Jointed and Stretched (BOZAR, Center for Fine Arts、ブリュッセル、ベルギー)
*「A Feverish Era in Japanese Art—Expressionism in the 50's and 60's」の関連イベントとして。
第46回ロッテルダム国際映画祭（ギャラリー・ジョイ・ラモーン、ロッテルダム）
第31回イメージフォーラムフェスティバル「切断された時間・繋がれた時間: 今井祝雄特集」（イメージフォーラム 東京ほか）
- 2018 今井祝雄—物質的恍惚（アクセル・ヴェルヴォールト・ギャラリー、ワインエーゲム、ベルギー）

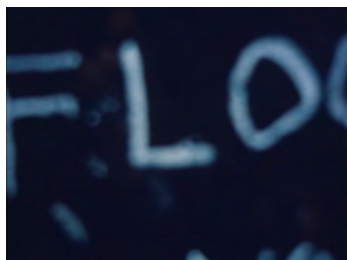
《FLOOR》

1972年 | 3分

カラー、サイレンス（原盤は16ミリフィルム）

*本展ではデジタル上映

1972年にテレビ局の企画で今井が映像を撮影し、放映された。今井自身が16ミリフィルムのカメラを持って撮影した唯一のフィルム作品。室内を歩きまわりファインダー越しに床を凝視した3分間の行為の記録。



ビデオ・パフォーマンス

1973 - 1983年 | 15分35秒

カラー、サウンド（原盤はUマチック）

《時間の衣装》《オン・エア》《矩形の時間》《セルフポートレート》
《ピザタイム》—5作品のダイジェスト版。

「現実世界、あるいは極めて個人的な関心ごとに対する一つの認識行為として行われるささやかな“できごと”、それがぼくのパフォーマンスである。その“できごと”の“あらわれ”として、写真やビデオに拠る作品がある。ある行為を映像に記録する、というよりも、その行為の副産物として、ビデオ作品（テープ）ができた、あるいは残った、というべきだろう。」

——今井祝雄「副産物としてのビデオ・パフォーマンスを通じて得た結論」『ビデオ ジャーナル』1980年9月1日3面



《セルフポートレート》1982年

© ACG プレスリリース

今井祝雄 Norio Imai



■ 略年譜 - 写真・映像作品の出版を中心に

- 1946 大阪市生まれ
- 1964 個展「17才の証言」(ヌース画廊、大阪)
第14回具体美術展(高島屋、大阪)
- 1965 大阪市立工芸高校美術科洋画コースを卒業。
第15回具体美術展(グタイピナコテカ、大阪)
具体美術協会会員となる。1972年の解散まで、全ての具体美術展に出品。
- 1966 海上のゼロ(オレッツ国際画廊、デン・ハーグ、オランダ)
第10回シェル美術賞展(白木屋、東京/京都市美術館)1等賞受賞
現代美術の動向(国立近代美術館京都分館)
個展(グタイピナコテカ、大阪)
空間から環境へ(松屋、東京)
- 1967 「具体」グループ展(ハイド・ヒルデブランド画廊、クラゲンフルト、オーストリア)
第5回パリ青年ビエンナーレ(パリ市立近代美術館)
第1回草月実験映画祭(草月会館ホール、東京/弥栄会館、京都)
- 1968 第8回現代日本美術展(東京都美術館/京都市美術館)
現代日本美術展一蛍光菊(ICA、ロンドン)
- 1970 具体グループによる展示(万国博みどり館、大阪)
第16回オーバーハウゼン国際短編映画祭(オーバーハウゼン、ドイツ)
- 1971 第10回現代日本美術展一人間と自然(東京都美術館/京都市美術館)
個展(ウォーカー画廊、東京)
- 1972 3人の心臓音による街頭イベント(御堂筋、大阪)
第7回ジャパン・アート・フェスティバル(メキシコ国立大学附属美術館、メキシコシティ/アルゼンチン国立美術館、ブエノスアイレス)
- 1973 第8回ジャパン・アート・フェスティバル(リュブリアナ近代美術館、ユーゴスラビア/マンハイム市立美術館、ドイツ)
- 1974 インパクトアート・ビデオアート '74(ギャラリー・インパクト、ローザンヌ、スイス)
第11回日本国際美術展一複製、映像時代のリアリズム(東京都美術館)
- 1975 第10回ジャパン・アート・フェスティバル(国立ウエリントン美術館、ニュージーランド/ヴィクトリア州立美術館、メルボルン/
クイーンズランド州立美術館、ブリスベン)
国際オープン・エンカウンター・オン・ビデオ(エスパス・ピエール・カルダン、パリ)
- 1976 第11回ジャパン・アート・フェスティバル(上野の森美術館、東京/ブロードウェイ・デパート、ロサンゼルス/
ワシントン州立大学附属美術館、シアトル)
- 1977 第7回国際オープン・エンカウンター・オン・ビデオ(ミロ美術館、バルセロナ)
03 23 03 プロジェクトとイベント(モントリオール/カナダ国立ギャラリー、オタワ)
イメージのネットワーク(イメージフォーラム、東京)
- 1978 アンダーグラウンド・シネマから個人映画まで(東京都美術館)
ジャパン・ビデオアート・フェスティバル(CAYC、ブエノスアイレス)
国際ビデオアート TOKYO '78(草月会館、東京)
- 1979 毎日の自画像《デイリーポートレート》を開始。
自画像による個展(番画廊、大阪)
- 1980 ビデオ・ローマ '80(ローマ民俗美術館、イタリア)
個展「矩形の時間」(ギャラリーキタノサーカス、兵庫)
- 1981 ビデオによる個展(ザ・バンク、アムステルダム)
個展「Videotape Performance」(ビデオギャラリーSCAN、東京)
- 1982 第4回シドニー・ビエンナーレ(ニューサウスウェールズ工科大学、シドニー)
個展「セルフポートレート」(中村画廊、大阪)
- 1983 現代美術における写真—1970年代の美術を中心として(東京国立近代美術館/京都国立近代美術館)
第12回モントリオール国際ニューシネマ・フェスティバル(モントリオールほか 2都市に巡回)
- 1984 AFI 国際フィルム・フェスティバル(AFI、ロサンゼルス)
- 1985 日本—未来のアヴァンギャルド(パラッツォ・トゥルシ、ジェノヴァ)
現代のセルフポートレート(埼玉県立近代美術館)



- 1986 ビデオカクテルIII(原美術館、東京)
- 1988 日本先端科技藝術展(台湾省立美術館、台中)
- 1989 河原温と同時代の美術 1966-1989(ICA 名古屋、愛知)
- 1990 オプティカル・ムービーの系譜(埼玉県立近代美術館)
ヨーロッパ・メディアアート・フェスティバル(オスナブリュック、ドイツ)
日本のビデオアート 80年代(ローマ日本文化会館ほか欧米を巡回)
ジャパニーズ・メディア - アートナウ(ハノーファー、ドイツ)
- 1992 日本のビデオ・アート特集—80年代編(世田谷美術館、東京)
フレームの美学—アニメーションの理論と実践(埼玉県立近代美術館)
現代日本の写真美術(ウォーカー・ヒル・アート・センター、ソウル)
- 1994 戦後日本の前衛美術(横浜美術館、神奈川)／グッゲンハイム美術館ソーホー、ニューヨーク／
サンフランシスコ近代美術館 ～1995)
時間／美術—20世紀美術における時間の表現(滋賀県立近代美術館)
- 1997 〈私〉美術のすすめ—何故 WATAKUSHI は描かれたか(板橋区立美術館、東京)
個展「デイリーポートレイトの四半世紀(夢創館、兵庫)
- 2006 ヴィデオアート・SCAN コレクション特集上映(川崎市市民ミュージアム、神奈川)
- 2007 ラディカル・コミュニケーション:日本のビデオアート 1968-1988(ゲティ・センター、ロサンゼルス)
- 2009 ヴァイタル・シグナル—日米初期ビデオアート(ジャパン・ソサエティ、ニューヨーク／ボストン美術館／
ロサンゼルス・カウンティ美術館／横浜美術館／国立国際美術館、大阪 ほか ～2010)
- 2011 Nul=0.—国際的文脈におけるオランダの前衛 1961-1966(スキェダム市立美術館、オランダ)
マスクド・ポートレイト パートII(マリアン・ボエスキー・ギャラリー、ニューヨーク ～2012)
- 2012 「具体」ニッポンの前衛 18年の軌跡(国立新美術館、東京)
個展「Retrospective—17才から22才」(アートコートギャラリー、大阪)
- 2013 具体:素晴らしい遊び場所(グッゲンハイム美術館、ニューヨーク)
個展「白のイベント」(アクセル・ヴェルヴォールト・ギャラリー、アントワープ)
- 2014 個展「白の遠近」(ギャラリー・リチャード、ニューヨーク)
1970年代の日本の写真におけるイメージと物質(マリアン・ボエスキー・ギャラリー、ニューヨーク)
個展「白からはじまる」(ユミコチバアソシエイツ・ビューイングルーム新宿、東京)
個展「Retrospective—影像と映像」(アートコートギャラリー、大阪)
- 2015 個展「Time Collection」(ユミコチバアソシエイツ・ビューイングルーム新宿、東京)
PROPORTIO (パラッツォ・フォルトゥニー、ヴェニス)
個展「Norio IMAI, (Part I) Shadow of Memory / (Part II) White Event」(ギャラリー・リチャード・パリ)
Re: play 1972/2015—「映像表現 '72」展、再演(東京国立近代美術館)
- 2016 Performing for the Camera(テート・モダン、ロンドン)
個展「白のイベント×映像 1966-2016」(ユミコチバアソシエイツ・ビューイングルーム新宿、東京)
ライブ・パフォーマンスとしての映像(東京都庭園美術館)
個展「Retrospective—方形の時間」(アートコートギャラリー、大阪)
蛍光菊(ICA、ロンドン)
- 2017 平成29年度第1回コレクション展(京都国立近代美術館)
Film and Video Works—Time Severed, Jointed and Stretched(BOZAR Centre for Fine Arts、ブリュッセル)
第46回ロッテルダム国際映画祭(ギャラリー・ジョイ・ラモーン、ロッテルダム)
第31回イメージフォーラム・フェスティバル「切断された時間・繋がれた時間:今井祝雄特集」(イメージフォーラム東京 ほか)
Intuition(パラッツォ・フォルトゥニー、ヴェニス)
Becoming & Dissolving: 'The Art of Appreciating Simple Beauty in a Naturally Imperfect World'(アリス・ブラック、ロンドン)
- 2018 具体—絵画の空間と時間(スラージュ美術館、ロデス)
個展「物質的恍惚」(アクセル・ヴェルヴォールト・ギャラリー、カナール、ワインエーゲム、ベルギー)
Fluorescent Chrysanthemum Remembered(Laznia Centre for Contemporary Art、グダニスク、ポーランド)
- 2019 個展「日本美術サウンドアーカイブ—今井祝雄《Two Heartbeats of Mine》1976年」(+1 art、大阪)

主なパブリックコレクション

芦屋市立美術博物館／大阪中之島美術館／京都国立近代美術館／滋賀県立近代美術館／兵庫県立美術館／宮城県美術館／
アクセル・アンド・メイ・ヴェルヴォールト財団(ベルギー)／ゲティ・センター(ロサンゼルス)／ファーマサイエンス・コレクション(カナダ)／
ラチョフスキー・コレクション(ダラス)